

体験型海外教育実地研究 第4学年 社会科

「Simpson's family and Isono's family」

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 横井 涼也

1 はじめに

私が体験型海外実地研究への参加を決めたのは、日本の学校における教育の枠組みをアメリカの学校で行われる教育との比較を通して捉えなおしていきたいと考えたからである。23年間、日本で行われる教育の枠組みに浸りきってきた自身にとって、日本以外の教育の場で授業を行い、学校訪問をすることは、今後の教育観のみならず自身の生き方についても改めて考え直す機会を与えてくれると思い、参加の意思を決めた。

2 実地研究の日程と概要

月日	曜	交通等	訪問地・用務等	宿泊地
4/26	木	渡航までの日程確認 パスポート確認 ESTA・保険の確認 授業研究テーマの設定方法		
5/18	金	授業研究テーマ案の交流		
6/7	木	学習指導案の検討		
7/2	月	学習指導案の検討 渡航のための諸手続き		
7/8	日	学習指導案の検討および教材・教具の作成 渡航のための諸手続き		
8/2	木	渡航準備 保険説明		
8/30	木	書類提出 報告書作成および発表会の打ち合わせ 直前打ち合わせ		
9/11	火	直前打ち合わせ		
9/15	土	広島→成田 0745-0925 (NH-3112) 成田→ワシントン ダラス 1105-1040 (NH-2) ワシントン ダラス→ローリー 1235-1340 (NH-7144) 空港 →City Hotel & Bistro		アメリカ ノースカロライナ州 City Hotel & Bistro 203 W. Greenville Blvd, Greenville, NC 27834 TEL(877)271-2616 Greenville
9/16	日	(サンドラ先生による送迎)	ミーティング, ホテルにて教材作り 各学校の先生方と事前打ち合わせ レセプションパーティ	Greenville 同上
9/17	月	City Hotel →エルムハースト小学校へ (Jimmyによる送迎)	学校訪問 (Elmhurst 小学校見学) 副校長先生による学校についての説明 校内見学, 授業見学 担任の先生と授業についての打ち合わせ	Greenville 同上
9/18	火	City Hotel →エルムハースト小学校へ	学校訪問 (Elmhurst 小学校) 授業実践	Greenville 同上

		ECU 大学訪問 (ECU の先生方 による送迎)	校内見学, 授業見学 午後イーストカロライナ大学訪 問・講義に参加する リソースセンターの見学 夕食はフットボールスタジアムで, それぞれの学校の先生方とリフレ クションをする。	
9/19	水	City Hotel →セン トピーターズカト リックスクールへ (タクシー) St.Peter's Catholic School → ローリー(タク シー)	学校訪問 St. Peter's Catholic School. 校内見学, 授業見学 午後 ローリーへ移動 ノースカロライナ州議事堂と自 然史博物館を見学する。	ノースカロライナ 州 Sheraton Raleigh 421 S. Salisbury Street Raleigh NC 27601 TEL(919)834-9900 Raleigh
9/20	木	徒歩で, エクスプ ロリスミドルスク ールへ	学校訪問 * Exploris M.S. (6-8) 午後も, エクスプロリスへ行き, 総 合的な学習の時間の授業を参観す る。	Raleigh (同上)
9/21	金	ローリー—ワシン トンダラス空港 1017-1124 (NH-7145) (空港からホテル までタクシー)	ワシントンへ移動 アメリカ文化体験	Washington Plaza 10 Thomas Circle, N.W. Washington, DC 20005 202.842.1300 / 800.424.1140 Fax: 202.371.9602 Washington DC
9/22	土	徒歩	アメリカ文化体験 スミソニアン博物館 ニュージウム見学	Washington DC(同 上)
9/23 9/24	日 月	ワシントンダラス—成田 1220-1525 (NH-1) 成田—広島 1740-1815		

3 実地研究授業

3.1 単元名 第4学年 社会「Simpson's family and Isono's family」

3.2 事前準備

① 単元設定の理由

本単元のねらいは、①アメリカの子ども達の間で人気のあるシンプソンファミリーとサザエさんの家の間取りを比較することを通して、個人を尊重するアメリカと共同性を尊重する日本の価値観の違いに気づく。②両家の間取りの同じ点であるリビングやダイニングから、アメリカも日本も、家族を大事にする姿勢は同じであることに気づく の2点である。アメリカの一般家庭について調べていたところ、トイレや風呂の数、個人に独立した部屋が与えられている点などアメリカ人の価値観を反映した家の作りが驚いたことが、授業を考えたきっかけである。シンプソン一家は、アメリカで最も有名な一家のアニメーションである。間取りの比較は、説

明的な分析を必要とするため、導入ではシンプソン一家の視点に立たせ、次第に比較をするように授業過程を考えた。比較の対象は、日本で最も有名なサザエさん一家とした。サザエさん一家は、現代の日本には珍しくなりつつある複数世代の同居や、畳やふすまで構成された家の作りなど日本の伝統的な生活スタイルを反映している。子ども達が、両家の違いと同じ点を見つけ出し、そこから人々の家のなかでの生活について想像することを期待した。

家具や部屋の作りといった個別の事象から、日本人の生活を想像し、より一般化された価値観の違いという概念に近づけることも隠れた目標としてあった。アメリカの子ども達が、日本の小学校社会科の授業理論（対象への理解から説明し、想像につなげる）のもとでどのような思考過程をたどるのかを観察することも期待していた。

② 準備したこと

授業準備では、両家の間取りの図の製作に時間をかけた。家の間取りの比較が本単元の主な活動になるからである。製作の注意点としたのは以下のことである。

- ・日本の共同性とアメリカの個性に気づかせるために、一つひとつの部屋に誰が住んでいるのかを、キャラクターの画像を貼ることで示した。また、特にトイレの数や風呂の数の注意が向くように、それぞれの家具は立体的に描き視覚的に家具がわかるようにした。

- ・家の間取りを比較するにあたり、子どもの意見が目標には結びつかない部屋の作りや家具などに注目できるようにすることも、子どもの気づきの広がり担保することにつながると考えた。そこで、日本とアメリカの家の作りのなかでも、日本が床を中心とする文化であることに気づいていく部屋のつくりや家具を図のなかに取り込んだ。具体的には畳や玄関に靴がおかれていることや、椅子やソファがないことなどである。

以上二点の事柄は、片方の家にはあるがもう一方には存在しない、またどちらの家にもある、といった比較による気づきにつなげるために、強調化して図示した。反面、家具の細かい形を統一するなど、ねらいにつながらない家の作りと判断したものは家の作りから棄却した。

3.3 学習指導案

Lesson Title : Simpson's family and Isono's family

Lesson Author : Yokoi Ryouya

Date : September 2012

Grade level : Grade I would like to teach : 5th grade (Elmhurst E.S.)

Subject : Culture

Description : In this class, students learn the difference about culture between United States and Japan through comparing houses in each country. The houses and the use of it are affected by each culture. Students can also notice character of each culture.

Objectives : As the result of the activity, students will be able to

- 1 Learn about the different sense of living with family through comparing the life style affected by each culture.
- 2 Notice that the love for the family is just the same in the US and Japan.

Activity	Teacher's activity	Materials
<p>1. Anticipate what main character of this class is through looking the silhouette of Simpson's family.</p> <p>2. Learn about Isono's family.</p> <p>3. Notice about the same and different points through comparing Simpson's house and Isono's house.</p> <p>4. Think how the layouts of house are decided.</p> <p>5. Learn about the different life style between the United States, Japan and also each family in the class.</p> <p>6. Students learn that family love is common all over the world even though the style of family is different.</p>	<p>1. Show the silhouette of Simpson and ask student about Simpson's family</p> <p>2. Show the silhouette of Isono and tell student "Do you know the most famous family in Japan?" 2 Show the animation of Isono's Family.</p> <p>3. Show the layouts of each house Teacher set up the situation. "Simpson's family study abroad and stay in Isono's family. Then, Homer is surprised. Why is he surprised?"</p> <p>4. Show the lives of Isono's Family, to think about Japanese life style. Ex. Sazae and Masuo and Tara sleep together in the same room. Each family uses one room and lives together.</p> <p>5. Ask a question with showing Isono's family life. [How do you spend a time with your family?]</p> <p>6. Ask a question [what is the same point of each picture?]</p> <p>6. Show a picture of family damaged by tsunami in Touhoku.</p>	<p>Silhouette of Simpson and Sazae Picture of each Family member Animation of "Sazae san" translated in English layouts of house of each family</p> <p>Picture Family life of Isono's Family</p>

3.4 授業の実際

(1) 導入において、自分の好きな絵を書くことについての紹介や、どこから来たのか、といったことを伝えた。子ども達は特に、授業者が書いた絵について興味を示してくれた。また、アイスブレイクでは、授業者の両手の人差し指が重なったタイミングに合わせて拍手をする活動

を行った。子ども達はすぐに内容を理解し、善い反応を示していた。

(2) シンプソン一家の視点から、シンプソン一家がサザエさんの家に出かけて行ったこと、サザエさんの家の間取りの登場というように構成したパワーポイントを用いて、家の間取りを比較するところまで導入を行った。

(3) シンプソン一家の視点から、「ホーマー（一家の父親）がサザエさんの家について驚いたことは何か？」という主要発問を行った。子ども達は授業者が提示したマーカーとシートを用いて、サザエさんの家について驚いたことを書きだしていた。

(4) 挙げられた意見を黒板に貼り、He is surprised there house is bigger and different than his. という意見を取り上げ、「何故大きいのか？」と発問した。子ども達は「お金をたくさんもってるからだ」「家族の数が多いからだ」という回答をおこなった。そのなかで、「一つの部屋に家族がたくさんいる」という気付きがでたため、そこから日本の家族は共同性を尊重する、という結びにつなげた。

(5) 日本の伝統的な和室を紹介するために、スライドで和室の写真を見せた。子ども達や先生も、部屋に椅子がなく座卓であることや、家具の少なさに驚いていた。子どもの一人が「日本人は床に座って生活するの？」という気付きを提出したため、畳や玄関の画像を見せて靴を脱いで畳のうえで過ごしたり、畳の上で座ったり寝たりする床の文化を説明した。

(6) 最後に、「両家の同じ所はどこか？」と子ども達に聞いた。子ども達から、「リビングやダイニングがある」という気付きがでたため、「どちらの家族も家族のスペースを大事にしている」と結んだ。授業の終わりに自身の家族写真を見せ、家族の紹介を行った。全体を通して、子どもたちは授業者の問いかけを理解しようと集中して聞いてくれていた。

3.5 考察

授業計画では、子どもの意見から授業の目標達成へと導いていく過程を計画していた。しかし、次のような課題から伝達型の授業になってしまったといえる。

まず一点目は子どもの気づきと意見の集約に関してである。子ども達は、家の細かい作りまでに観察が至らず、家の概観やシンプソン一家がサザエさん一家の家に行った、ということを中心に考えていた。原因は、教材の示し方にあった。家の間取りをホワイトボードに貼ったとき、両家が比較できるように並べて提示できなかったことや、話の展開ではなく家の間取りに注目させるような示し方をすべきであった。

意見の展開のさせかたとしては、Because Japan is way different from where he lives. という意見から、「どのように過ごしているのか、家の間取りから想像してごらん」といった発問によって深めるべきであった。綴りや文法のミスから、瞬間的に意味を把握することができないものがあつたことと、意見を整理するスペースがなかったことがあり、目標に照らして適切な発問ができなかった。

二点目は、教材の種類に関してである。視覚的な教材として部屋の間取りを選択したが、子どもたちにとって部屋の内部を想像する情報に欠けていた。その証拠に「日本人は床で生活するののか」という気付きは写真の提示の後であった。

結果として、言語の壁というよりも、視覚教材の示し方や授業の構成が原因となって伝達型の授業になっていた。ただ、いくつかねらいに即した子どもの発言を得ることができたことや、子どもの発言からさらに発問を展開させることができた。言葉が通じづらいなかでも、子ども

の発言によって授業を構成しようと積極的に働きかけることはできたと思う。

4 体験型教育実地研究における自己変容

4.1 教育観の変容

教育観に関わることで自身にとって一番の衝撃は、最後の訪問校である exploris 校への訪問であった。ここで自身が体験したのは、理想とすべき教師像や学習者像が具体的な実態をもって与えられたことである。

ここでは、子どもが自身の課題を決定し、学習する、という教育の理想がなされていた。学習とは、本来何らかの目的意識のもとになされる主体的な活動であるはずである。ここでは自分が教師となり、目指すべき子どもの姿を見たように思う。指導者を必要とするのではなく、共に学ぶ仲間を必要とし、自ら学びを展開していくことのできる子どもを育てたい。教師自身も、指導者として子どもの行く末を配慮しつつ、共に学ぶ仲間として刺激し合えるような関係を子どもと作っていく教師像を目指していきたい。

4.2 自分自身についての変容

長く自分自身が課題として感じてきたことの一つに、対人恐怖がある。言葉の通じない外国の方と接する時はなおさらで、「言葉や言いたいことが通じない」という恐れが、いっそう人と接することを自身に避けさせようとした。しかし実地研究では、授業や生活で人と接しなければならない状況に立たされ、そのなかで必死に伝えようともがくなかで、伝えあえることの喜びを見出せたと思う。人と接することへの肯定的な気持ちを忘れないようにしていきたい。

4.3 グローバルマインドに関する変容

大きな言葉のように感じる「国際」は、結局は「人の際」であったように思う。言葉や外見といった壁は、日本にいても自分自身が他人に対して持つ心の壁の延長にすぎなかった。壁を普段よりも意識する海外での授業や生活は、そうした壁を乗り越えて人とコミュニケーションすることの大事さを改めて意識させてくれた。

また、「考える」という行為は、人間に本質的な営みであり、世界共通であることを実感させられた。授業のなかで発した発問に反応する子どもや、子どもの思考を高めようとするアメリカの先生方の指導理論にそうした営みを見つめることができた。将来の教え子にも、「考える」ことの大切さ、楽しさを伝えていきたいと強く思った。

5 おわりに

体験型実地研究での授業、学校訪問、子どもとの関わりは、自身の教育観や人生観にも大きな揺さぶりをもたらしてくれました。今日まで関係を築きあげ、その関係のなかで体験の機会を与えてくれた先生方、拙い授業や英語を一生懸命受け止めようとしてくれたアメリカの子どもたちに心から感謝したいです。ありがとうございました。